

開催概要

■開催概要

- シリーズ名称 : MFJ公認・承認2019鈴鹿・近畿選手権シリーズ最終戦
第55回NGKスパークプラグ杯鈴鹿サンデーロードレース
併催 / CBR250RR Dream Cup DUNLOP杯 グランドチャンピオンシップ2019
HRC NSF250R Challenge グランドチャンピオンシップ 2019
- 主催 : 株式会社 モビリティランド 鈴鹿サーキット
- 協賛 : 日本特殊陶業 株式会社
- 会場 : 鈴鹿サーキット国際レーシングコース・フルコース(2輪/5.821km)
- 参加台数 : 総参加台数 / 255台
 CBR250RR Dream Cup DUNLOP杯 グランドチャンピオンシップ2019 30台
 インターST600 14台
 ST600R(Revival) 30台
 インターJ-GP3 5台
 ナショナルJ-GP3 24台
 HRC NSF250R Challenge グランドチャンピオンシップ2019 12台
 ナショナルJSB1000 32台
 インターJSB1000 42台
 ナショナルST600 37台
 インターJP250 3台
 ナショナルJP250 38台
- 開催日 : 2019年11月30日(土)・12月1日(日)
- 天候 / 路面 : 快晴 / ドライ(決勝日:12月1日)

今大会をもちまして、2019鈴鹿・近畿選手権シリーズはレース日程はすべて終了しました。
2020年の開催スケジュール(暫定)等につきましては、鈴鹿サーキット公式ホームページをご覧ください。
<https://apps.mobilityland.co.jp/mseentry/download/1>

★レースリザルトはインターネットでご覧いただけます。レース写真は、バトルファクトリー様のHPでご購入いただけます。
リザルトページ https://www.suzukacircuit.jp/result_s/ バトルファクトリーHP <http://www.battle.co.jp/>



全体レポート

最終戦は伝統のNGKスパークプラグ杯
全クラスで無事シリーズチャンピオンが決定!

今シーズンの鈴鹿サンデーロードレースは4月7日(日)の西コース大会にて開幕。それを含めてこれまでに5戦が行われ、いよいよ今回の第6戦が今シーズンの最終戦となった。今回は全カテゴリーのシリーズチャンピオンが決まる一年でもっとも大切なレース。各選手もいつも以上に白熱したバトルを披露した。

11月30日(土)に行われたインター／ナショナルJP250の公式予選では、インタークラスに参戦した全日本ライダーの伊達悠太が2分31秒623をマーク。そのタイムは従来の2分32秒082を上回るニューコースレコードとなった。また、ナショナルJP250の片山千彩都がそのタイムをさらに上回り、ポールポジションからスタートすることとなった。

鈴鹿サンデーロードレースで行われている各カテゴリーのレースに加え、今回はCBR250RR、NSF250Rの日本一を決める「CBR250RR Dream Cup」「HRC NSF250R Challenge」の「グランドチャンピオンシップ2019」も行われた。これらのレースでは全国にある各サーキットのトップランカーたちがそれぞれのサーキットで磨いたテクニックを試すかのように各コーナーで熱いバトルを展開。まさに激戦と言える戦いの末、CBR250RRでは田中風如、HRC NSF250R Challengeでは古里太陽が日本一に輝くことになった。

鈴鹿サンデーロードレース最終戦の恒例と言えば「NGKスパークプラグ杯」という名で呼ばれる伝統の一戦だ。日本特殊陶業株式会社のご協賛の元、昭和40年から平成7年まで「鈴鹿モトクロス大会」として計31回が開催され、平成8年からは「鈴鹿サンデーロードレース」の最終戦として開催されるようになり、今年はその55回大会だった。

土曜日に公式予選、日曜日に決勝レースが行われる2DAY大会であるこのレースを最後に、2019年シーズンの鈴鹿サンデーロードレースの全戦が無事終了した。



レースレポート(1)

■CBR250RR Dream Cup
DUNLOP杯 グランドチャンピオンシップ2019

ポールスタートの鈴木悠大がホールショットをゲット。その鈴木、2番グリッドスタートの三浦雄一、3番グリッドスタートの梶山采千夏のオーダーでオープニングラップを帰ってくる。2周目の1コーナーで梶山がトップに。同じく2周目に田中風如が2位に浮上する。トップグループを形成する梶山、田中、鈴木、三浦の背後を谷川荘洋と高橋孝浩が走行。4周目のシケインで谷川がトップに。5周目には鈴木、田中、梶山がトップワンツースリーとなるが、7周目には10台ほどが集団に。田中、梶山、谷川のオーダーでファイナルラップへと突入すると、そのオーダーのままチェッカー。鈴鹿のチャンピオン鈴木は4位だった。



CBR250RR Dream Cup DUNLOP杯 グランドチャンピオンシップ2019表彰式
(優勝: 田中風如、2位: 梶山采千夏、3位: 谷川荘洋)

■インターST600

ホールショットを奪ったのは3番グリッドスタートの砂泊孝太。ポールポジションスタートの伊達悠太が出遅れるが、オープニングラップのシケイン立ち上がりで2位に。伊達はそのまま砂泊をもパスしてトップに立つが、130R進入では砂泊がトップに返り咲く。その2台はその後もテールtoノーズのバトルを展開。2番グリッドスタートの松永修はオープニングラップのスプーンカーブでコースアウトするが、すぐにコースに復帰する。4周目のデグナーカーブ一つ目で伊達が砂泊をパスしてトップに。砂泊を引き離れた伊達がトップチェッカーを受けた。松永が転倒。3位争いを制した澤村俊紀がチャンピオンに輝いた。



インターST600表彰式 (優勝: 伊達悠太、2位: 砂泊孝太、3位: 澤村俊紀)

■ST600R (Revival)

2番グリッドスタートの岸本修が良いクラッチミートを披露してホールショットをゲット。ポールポジションスタートの前迫祥平がそれに続く。後続を引き離れた岸本、前迫のオーダーでオープニングラップを帰ってくると、2周目に岸本は前迫をも引き離すことに成功。オープニングラップ終了時点でコンマ3ほどだった岸本と前迫の差は2周目終了時点ではコンマ808へと広がる。3周目終了時点ではその差はコンマ479へ。前迫は予選時のタイムより速いペースで周回。岸本と前迫は再びテールtoノーズの状態になるが、6周目には岸本が単独状態に。岸本に続く2位でチェッカーを受けた前迫がチャンピオンを決めた。



ST600R (Revival) 表彰式 (優勝: 岸本修、2位: 前迫祥平、3位: 井上正光)

レースレポート(2)

■インターJ-GP3／ナショナルJ-GP3 HRC NSF250R Challenge グランドチャンピオンシップ2019

3番グリッドスターの古里太陽がホールショットを奪い、それにポールポジションスタートの村瀬健琉、2番グリッドスタートの濱田寛太と続く。オープニングラップで村瀬が古里をパス。村瀬、古里、濱田がトップグループを形成する。3周目の1コーナー進入で古里が村瀬をパス。同じく3周目の西ストレートでは村瀬が古里の横に並ぶがパスするには至らない。4周目に村瀬が古里をパスしてトップに。6周目の1コーナー進入では古里がトップに返り咲く。古里がファイナルラップまで続いたバトルを制すると同時にナショナルクラスのウィナーとなり、チャンピオンに輝いた。総合2位の村瀬がインタークラスを制した。



インターJ-GP3表彰式 (優勝:村瀬健琉、2位:大堀和基)



ナショナルJ-GP3表彰式 (優勝:古里太陽、2位:濱田寛太、3位:渡邊虎太郎)



HRC NSF250R Challengeグランドチャンピオンシップ2019表彰式
(優勝:古里太陽、2位:濱田寛太、3位:渡邊虎太郎)

レースレポート(3)

■ナショナルJSB1000

ポールポジションスタートの香川純が絶妙なクラッチミートを披露。それに4番グリッドスタートの辻尾裕司、3番グリッドスタートの喜田優人と続く。その2台がオープニングラップからテールtoノーズのバトルを展開。その間に香川が単独トップの座を築く。2番グリッドスタートの大須賀俊晴が香川に続く2位でオープニングラップを終了。ランキンリーダーの沖永博一が4位に浮上する。大須賀も単独2位に。その後方で喜田と沖永がバトルを披露する。徐々に大須賀が香川に接近し、トップグループも2位での争いに。トップチェッカーを受けたのは香川。3位入賞を果たした沖永のチャンピオンが決まった。



ナショナルJSB1000表彰式 (優勝:香川純、2位:大須賀俊晴、3位:沖永博一)

■インターJSB1000

ホールショットを奪ったのは2番グリッドスタートの安田毅史。それに4番グリッドスタートの西村一之、6番グリッドスタートの宮腰武と続く。安田、西村、3番グリッドスタートの松本隆征のオーダーでオープニングラップを終了。2周目のスプーンカーブで松本が西村をパスすると、松本はシケイン進入で安田をもパスしてトップに立つ。4周目のヘアピンで安田が再びトップに。松本は柴田義将の先行をも許す。6周目の110Rで松永修が転倒。これにより赤旗が出される。6周目の第2レースでは柴田がホールショットを奪うが、安田がトップチェッカー。チャンピオンに輝いたのは4位でチェッカーを受けた西村だった。



インターJSB1000表彰式 (優勝:安田毅史、2位:黒木玲徳、3位:柴田義将)

■ナショナルST600

ポールポジションスタートの綿貫舞空が良いスタートを切る。2番グリッドスタートの屋代原野がその綿貫をパス。屋代が一時的に抜け出す。その2台が再びテールtoノーズの状態に。綿貫、屋代、4番グリッドスタートの小野川鉄太郎のオーダーでオープニングラップを帰ってくる。すぐに綿貫が単独トップに。2周目終了段階での綿貫と屋代以降とのタイムギャップは1秒360。その後もアドバンテージを広げ続ける綿貫の後方で屋代、小野川、増田雄基の3台が激しく2位の座を争う。そこから抜け出すことに成功した増田が単独2位に。トップチェッカーを受けた綿貫に続く2位に入賞した増田がチャンピオンを決めた。



ナショナルST600表彰式 (優勝:綿貫舞空、2位:増田雄基、3位:屋代原野)

レースレポート(4)

■インターJP250／ナショナルJP250

すでにナショナルクラスのチャンピオンを決めている片山千彩都がポールポジションからスタート。その片山、2番グリッドスタートの伊達悠太のオーダーで1コーナーへと突入していく。S字コーナーで伊達が片山をパスするが、ダンロップでは片山が再び前に。片山、伊達、4番グリッドスタートの桐石世奈、3番グリッドスタートの福井宏至のオーダーでオープニングラップを帰ってくる。3周目に片山が単独トップになりかけるが、再び伊達とテールtoノーズの状態に。その2台のバトルはファイナルラップの最終コーナー立ち上がりまで続いたが、伊達がトップチェッカー。片山はナショナルクラスで今季全勝を飾った。



インターJP250表彰式 (優勝:伊達悠太)



ナショナルJP250表彰式 (優勝:片山千彩都、2位:笠井杏樹、3位:南博之)

Voice of Pick up Rider -SUNDAY EDITION-

Voice of Pick up Riders -SUNDAY EDITION-

この日、キラリと光った
ライダーにー問一答

この日、キラリと光ったライダーにー問一答
「Voice of Pick up Rider -SUNDAY EDITION-」

鈴鹿ST600R(Revival)で今季初優勝

岸本 修 選手(29歳)
(BIG WONDER&K,sAUTO&愛知トヨタ/ホンダCBR600RR)



Q.公式予選では4戦連続でポールポジションを獲得した前迫祥平選手に続く2番手タイムでした。

いつも前迫選手に勝てないのです。頑張ったつもりなのですが、今回も前迫選手が前でした。また今回もか!と思いました。

Q.決勝レースでは良いスタートを披露しました。

スタートは得意なんです。途中で後ろを振り返ったらすぐ後ろに前迫選手がいたので、いつどこで仕掛けてくるのか、ドキドキしながら走りました。

Q.今シーズン初優勝を飾りましたね。

ン初優勝を飾りましたね。

A.勝てて良かったです。やっと勝てた!という感じです。実は予選と決勝ではセッティングをガラッと変えたのです。路面温度が上がらないと感じたので、サスペンションをやわらかめの方向に持っていました。それが効いたと思います。